

石灰化が気になれば…

乳がん確定診断の勧め

「石灰化はあるが、ほぼ良性。経過観察しましょう」「細胞診は異常なし。半年後に来てください」乳がん検診や病院での精密検査で、こんな説明をされた女性は多いはず。だが、こうした結論の「先送り」が不安を増幅することもある。

良性でも悪性でも、女性 診で左胸に当たった手のひらたちは一日も早い確定診断を望んでいるが、実際には、不安を抱えたまま次の検査を待つ人が多い。専門家は「経過観察に納得できないなら、医師に気持ちを伝え、確定診断可能な最新の検査受診に一步踏み出すべきだ」とアドバイスする。

都内で助産院を営む高木美佐子さん(46)は二〇二〇年十月、乳がんの確定診断を受けた。異変に気付いたのはその年の八月。自己触

マンモ生検で早期発見

高木さんは大病院の乳腺外科を受診。触診した医師の見立ては良性、細い注射針で細胞を採取する細胞診でも異常なし。さらに超音波検査と、乳房をエックス線で撮影するマンモグラフィでも異常は見つからなかった。だが、医師は何か

広い範囲から多量の組織を取れるため、細胞診に比べて格段に正確な診断が可能だ。傷口が小さく、手術室で組織を摘出する外科的生検より体の負担も少ない。この検査で乳がんが見つかった高木さんは、十月下旬に手術した。初診からわ

引つかりを感じたのだろうか。「念のため」と、最新のマンモトーム生検を勧めた。

マンモトーム生検は、局所麻酔下で直径三・五ミリの針を病変部に刺し、周囲の組織を吸引して採取する。

マンモグラフィー検査で悪性度を測るカテゴリー分類

カテゴリー1	異常なし
カテゴリー2	明らかに良性病変のみ
カテゴリー3	良性の可能性が高いが、悪性の疑いも否定できない
カテゴリー4	悪性の疑いあり
カテゴリー5	ほぼ乳がんと考えられる

み出されるものがある。義姉は経過観察となったが、一年後にがんを疑われ、今年一月のマンモトーム生検で診断が確定した。「不安の中で経過観察したが、結果的にはリンパ節に転移し苦しんでいる。踏み込んだ検査をしていたら」と高木さん。

四谷メディカルキューブ(東京都千代田区)の長内孝之・乳腺外科部長によると、石灰化は形や分布の仕方でも悪性度が分類され、カテゴリー1と2なら精密検査は必要ないが、3の一部と4、5はマンモトームによる確定診断が推奨される。

「石灰化を指摘されたら、患者もカテゴリーを確認すべきだ。方針が納得できないければ医師に理由を聞き、確定診断を希望してみてもいい」と長内さんは助言する。